

稱讚 一九四号

二〇一九年二月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三十五二四二二二〇二五

FAX 〇三十五二四二二二〇二六

欣求淨利の道俗、深く信不具足の

金言を了知し、

永く聞不具足の邪心を離るべきなり。

如来の所説は十二部経なり。

ただ六部を信じていまだ

六部を信ぜず、このゆゑに

名づけて聞不具足とす。

またこの六部の経を受持す

といへども、

読誦にあたはずして

他のために解説すれば、

利益するところなけん。

このゆゑに名づけて

聞不具足とす。

またこの六部の経を受けをはりて、

論議のためのゆゑに、

勝他のためのゆゑに、

利養のためのゆゑに、

諸有のためのゆゑに、持読誦説せん。

このゆゑに名づけて

聞不具足とす。

「教行信証」 信巻

御正忌報恩講に出仕するため、二月十四日、朝、新幹線に乗り、京都へ向かいました。

途中、晴天に映えた富士山が見えますとの、

車掌さんのアナウンスがあり、いつもだと、寝

ている私ですが、思わずシャッターをおしまし

た。後になって、この二月号を作成する時に、

これを表紙にお話ししようと思ったのですが、す

がすがしい話がいつきませんでした。

あるご法話に、富士山には、古い噴火口の

跡が、こぶのようになっている場所があります

が、右でしたか、左でしたか、どっちでしたか

ね」と尋ねたら、あるお寺の御同行が即座に

見る場所が違います」とお答えされたことか

ら、見る場所が違う」のは当たり前のことと

誰もが気づくことなのですが、私たちは、本当

にそのことを踏まえて毎日を暮らしているの

でしょうか？と問うお話を讀みました。

群盲象を評する」インド発祥の寓話を思い

出します。

暗闇の中で、数人の男達が、それぞれ象の鼻

や牙、足、お腹、しっぽなど別々の一部分だけ

を触り、その感想について語り合っているのが、

触った部分によって感想が変わりますので、そ

れぞれが正しいと主張して言い争うのです。最

後には、それぞれが象の一部分であることに気

付き、象の全体が判り、お互い理解しあうので

す。木を見て森を見ず」との諺もあり、私は
真実はもちろん、事実の一部だけを知って、わ
かったような気になり、また、自分の考えが正
しいと思ひ込んでしまうことが多々あります。

親鸞聖人は、「教行信証」の中で、安樂

集』の「貫連所問経」を引用して、外教を信じ

る人を差別的にも捉えられる「無眼人」「無耳

人」の言葉を引用されておられます。

目の見えない方・耳の聞こえない方ほど、心

の眼・耳と言いましようか、私よりよく見て、

よく聞いておられると思うことがあります。

親鸞聖人がおっしゃりたかったのは、知恵が

ある者ほど、自分が正しいと思っている者ほ

ど、真実を見れない、聞けないということをお

おっしゃりたかったと思います。

また、「信不具足」「聞不具足」という表現

があります。

「信」には、「聞より生ず」と思より生

ず」るがあり、他人から聞いただけを鵜呑みに

して、自ら思念しないこと、また「道」理

論」は分かっても、本当にご信心を得た人に巡

り逢っていないことを「信不具足」と言いま

す。

「聞不具足」は、全体を十分に把握しないま

ま、自分は全部わかったと思ひ込み、人に解説

したり議論する。利権のためにししたり、

都合のいいところだけを取り入れる聞き方

です。

「信不具足」は、聞く姿勢はまじめだけど、

不十分な点があるけど、否定すべきではなく、

「金言」として心得ておきましょうに止まって

おりますが、「聞不具足」は、邪心であると誠

めておられます。

私自身、思ひ込みが激しいようです。

親鸞聖人御誕生八五十年 立教開宗八百年 についての消息

来る二〇二三年には、宗祖親鸞聖人のご誕生八五十年、また、その翌年には立教開宗八百年にあたる記念すべき年をお迎えするにあたり、二〇二三年に慶讃法要をお勤めいたします。

親鸞聖人は承安三年・一一七三年にご誕生となり、御年九歳で出家得度され、比叡山で修行を重ねられました。二十九歳の折、山を下りて法然聖人の御弟子となられ、阿弥陀如来の本願念仏の世界に入られました。その後、専修念仏停止によって越

後に、ご流罪になられ、赦免の後は関東に赴かれて他力念仏のみ教えを人々に伝えられるとともに、『教行信証』の執筆にとりかかられました。他力念仏のみ教えがまとめられた本書は、浄土真宗の根本聖典という意味で、ご本典と呼ばれています。そして、そのご本典の記述によって、その成立を親鸞聖人五十二歳の時、すなわち元仁元年・一二二四年とみて、この年を立教開宗の年と定めています。

仏教は今から約二千五百年前、釈尊が縁起や諸行無常・諸法無我というこの世界のありのままの真実をさとられたことに始ま

ります。翻って私たちは、この執われのないうおさとの真実に気づくことができず、常に自分中心の心で物事を見て、悩み、悲しみ、あるいは他人と争ったりします。釈尊は、このような私たちをそのままに救い、おさとの真実へ導こうと願われたのが阿弥陀如来であることを教えてくださいました。そして、親鸞聖人は、この阿弥陀如来の願いが、南無阿弥陀仏のお念仏となってはたらく続けてくださっていることを明らかにされたのです。

ありのままの真実に基づく阿弥陀如来のお慈悲でありますから、いのちあるものすべてに平等にそそがれ、自己中心的な考え方しかできない煩惱具足の私たちも決して見捨てられることはありません。その広大な慈悲を思うとき、親鸞聖人が「恥づべし傷むべし」とおっしゃったように、阿弥陀如来のお心とあまりにもかけ離れた私たちの生活を深く慚愧せざるをえません。しかし、この慚愧の思いは、阿弥陀如来の悲しみを少しでも軽くすることができればという方向に私たちを動かすでしょう。

それは、阿弥陀如来の願いを一人でも多

くの人に伝え、他人の喜び悲しみを自らの喜び悲しみとするような如来のお子於呂にかなう生き方であり、また、世の安穩、仏法弘通を願われた親鸞聖人のお心に沿う生活です。み教えに生かされ、いよいよお念仏を喜び、すべてのいのちあるものが、お互いに心を通い合わせて生きていけるような社会の実現に向け、宗門総合振興計画の取り組みを進めながら、来るべき親鸞聖人ご誕生八五十年ならびに立教開宗八百年の慶讃法要をともお迎えいたしましう。

平成三十一年

二〇一九年

一月九日

龍谷門主 釋專如

ご消息を拝して 石上智康総長

本日、御正忌報恩講法要の初日を迎え、ただいま、ご門主さまから、親鸞聖人ご誕生八五十年、立教開宗八百年についてのご消息をたまわり、来る二〇二三年に慶讃法要をお勤めする旨ご治定いただきました。その深いおぼしめしに、身の引きしまる思いであります。

立教開宗以来、宗祖聖人がお示くださった浄土真宗のみ教えは、ご歴代宗主のもと脈々と受け継がれ、お念仏申して生き抜かれた多くの人びとによって支えられ、

先人をはじめ、現代に生きる私たちの確かな拠りどころとして国の内外に広がりました。

ただいまのご消息にお示しのごとく、宗門総合振興計画の取り組みを進めながら、親鸞聖人が「世のなか安穩なれ、仏法ひろまれ」と願われたお心、ご門主さまのお心を、宗門に集うもの一人一人が深く受けとめ、仏智に教え導かれ、一歩一歩、力を尽くしてまいりたいと存じます。

ご門主さまは「仏教は今から約二千五百年前、釈尊が縁起や諸行無常・諸法無我というこの世界のありのままの真実をさとられたことに始まります」とお示しになりました。ありのままの真実に基づく阿弥陀如来のお慈悲でありますから、いのちあるものすべてに平等にそそがれ、自己中心的な考え方しかできない煩惱具足の私たちも決して見捨てられることはありません」と、仏法に基づく浄土真宗のみ教えであることを明示されたのであります。縁起や無常・無我などという言葉で解き明かされているこの世界のありのままの真実こそが仏法であり、それゆえにこそ、仏教は特定の宗教というようなものを超えているといわれています。

私たちは、ご門主さまのご教導によって仏法の真理観に、そして浄土真宗の阿弥陀如来のお慈悲による「そのままの救い」の有り難さ尊さに、あらためて、思いをいた

さねばなりません。おさとの真実とあまりにもかけ離れた日々の生活を深く恥じるとともに、自分だけを大事にすることなく、人と喜びや悲しみを分かち合「うなど、少しでも仏法にかなう生き方を目指し、精いっぱい努めさせていただく人間になるのです。

み教えに生かされ、いよいよお念仏を喜び、自他ともに心豊かに生きていくことのできる社会の実現に貢献すべく、私たちは心を一つにして精進し、共々に二〇二三年の親鸞聖人ご誕生八百五十年ならびに立教開宗八百年の慶讃法要をお迎えいたしまししょう。

ご消息を拝して、いささか思うところを申しあげ、決意の表明とさせていただきます。

御正忌報恩講法要初日の一月九日、午後二時からの逮夜法要に続いて御影堂でご消息発布式が行われた。

発布式には、前門さま、お裏方、前裏方さまが臨席され、千人が参拝した。静寂の中、入堂されたご門主が「親鸞聖人御生誕八百五十年、立教開宗八百年についての消息」を親読された。この後、石上智康総長がご消息を拝して決意を表明された。

参拝した滋賀県彦根市の信行寺門徒・岡田甚六さん（右）は「御正忌報恩講の初日にお参りさせていただき、ご門主さまのご

消息をいただき、本当によいご法縁に遇わせていただいた。立教開宗八百年はとても大事なこと。是非、仲間と一緒に四年後の法要に参拝させていただきたい」。

東京の大学生・栗波嵩也さん（右）、兵庫県尼崎市・弘誓寺門徒）は「帰敬式を受けるためにお参りし、ご消息をいただくご縁に遇えた。少しでも阿弥陀さまが悲しまれないようにお聴聞を重ねていきたい。今年が父の十三回忌、そのご縁で聴聞するようになり、中央仏教学院の通信教育も受講している。同世代にみ教えを広めるために努めていきたい」と話した。

（奉願寺新報）

二〇一九年二月二〇日号より）

『奉願寺新報』のご消息を読ませていただき、もう四年後かと思ひ、うかうかしておれないなあと思つたことでもあります。そして、発布式に参加されたご門徒さんのコメントを読んで、既に四年後の法要に心を馳せ、御同行御同朋の自覚のもと、自身も携わると共に宗門に期待されていることを窺うことであります。

私も「同一に念仏して他の道なき」者の一人として、ご縁の皆さまと共にお念仏を申し、阿弥陀さまのご本願をお伝えして、こうと新年を迎えようと心新たに思うことであります。

稱讚寺

春季彼岸会のご案内

浄土への道は

浄土から開かれたものである

金子大榮師

善導大師は、「一切往生人等にまうさく」と述べて「二河白道」について解説されました。

親鸞聖人も『教行信証』の中で、敬つて一切往生人等にまうさく、弘誓一乗海は、無碍無辺最勝深妙不可説不可称不可思議の至徳を成就したまへり。」と述べておられます。

この「一切往生人等」とは誰らのことでしょうか。

『浄土文類聚鈔』では、「道俗等」心昏く識寡なきもの」「悪重く障多きもの」の言葉があります。また、『教行信証』総序には、むかれば凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。穢を捨て浄を欣ひ、行に迷い信に惑ひ、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、ことに如来の発遣を仰ぎ、かならず最勝の直道に帰して、もっぱらこの行に奉へ、ただこの信を崇めよ。」とのべられておられます。

このことから、「一切往生人」とは、何も自ら、お浄土へ往生したい、しようと思つている人、人のことではないと思われま

す。この人生を四苦八苦しなから歩んでいる全ての方を指していると思われま

す。そういう私たちに親鸞聖人は「敬つて」と申されておられるのです。

ご一緒に、阿弥陀さまのおはたらき、お心を聞いて参りましょう。

春のお彼岸は左記の通り、おつとめいたします。

記

日時 三月二十四日 昏 十四時

日程

- 一四 〇〇 おつとめ
- 一四 四〇 法話 住職
- 一五 四〇 茶話会
- 一四 三〇 恩徳讃

※前日二三日(土)には、カブ町屋にて、鶴田義光師の法話会がございます。午前・午後と三回に分けて、お話しさせていただきますので、ご都合の時間帯にご聴聞いただきたくご案内申し上げます。詳細は本紙七頁をご覧ください。

濱田多賀子様（釋慈愛）のご分骨を大谷本廟にご納骨致しました

一月十四日、御正忌報恩講の逮夜法要に出勤する前に、大谷本廟に参拝いたしました。濱田多賀子様のご分骨を稱讚寺所有の納骨壇に納めさせていただきます。これで、ご夫婦揃いで当納骨壇に納められたご縁をいただきました。

現在、坂根忠男さんの奥さま、池田律子さんのご主人、福井恒彰さんの奥さまと奥さまのお姉さんのご分骨をお預かりいたしております。

大谷本廟は、親鸞聖人のお側にずっとおれる場所でありま

す。ご希望の方がいらつしやいましたら、稱讚寺にお問い合わせください。ご納骨お布施ご一体一万円でお預かりいたします。



ご文章を味わう

海

蓮如上人がお書きになった『御文章』を浅井成

易往無人章 (二帖第七通)

しずかにおもんみれば・それ、人間界の生を受くることは、まことに五戒をたもてる功力によりてなり・これおおきにまれるることぞかし、ただし人界の生はわずかに一旦の浮生なり・後生は永生の楽果なり、たといまた榮華にほこり・榮耀にあまるといとも、盛者必衰会者定離のならないれば・ひさしくたもつべきにあらず、ただ五十年百年のあいだのことなり、それも老少不定ときくときは・まことにもつたのみすくなし、これによりて今の時の衆生は・他力の信心をえて・浄土の往生をとげんとおもうべきなり、そもそも、その信心をとらんずるには・さらに智慧もいららず才学もいららず・富貴も貧窮もいららず、善人も悪人もいららず・男子も女人も

いららず、ただもろもろの雑行をすてて・正行に帰するをもつて本意とす、その正行に帰するといふは・なにのようもな^{みだによらい}く・弥陀如来を一心一向にたのみたてまつる理ばかりなり、かように信ずる衆生を・あまねく光明のなかに撰取して・捨てたまわずして、一期の命尽きぬれば・かならず浄土におくりたまうなり、この一念の安心一つにて・浄土に往生することの・あらゆるもいらぬとりやすの安心や、されば、安心という二字をば・やすきころとよめるはこのころなり、さらににこの造作もなく・一心一向に如来をたのみま^{ごうしんごうごう}いらする・信心ひとつにて・極樂に往生すべし、あらゆるえやすの安心や・またあらゆるやすの浄土や、これによりて大經には、易往而無人とこれを説かれたり、この文のころは・安心をとりて弥陀を一向にたのめば・浄土へはまいりやすけれど、信心をとるひとまれなれば・浄土

へは行きやすくして人なしといえるは・この經文のころなり、かくのごとくころるうるうえには・昼夜朝暮となうるところの名号は、大悲弘誓の御恩を・報じたてまつるべきばかりなり、かえすがえす仏法にころをとどめて・とりやすき信心のおもむきを存知して、かならず今度の大事の報土の往生を・とぐべきものなり、あなかしこ あなかしこ

文明六年三月三日これを清書す

浅井成海師現代語訳

静かに思いめぐらしてみれば、そもそもこの人間界に生を享けたのは、まことに、在俗の仏教徒の持すべき五戒 不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒を守ったはたらきによるものです。これはもう、たいへんに稀有なことだといわなければなりません。ただしかし、人間界の生というものは、辛うじてしばしの間だけ水に浮かんで泡のようなものにすぎません。それに対して、後の世に浄土へ生まれることは、永遠の命を得る、まことの樂の果報です。

たとえまた、富や地位に誇り、誰もがうらやむばかりに栄えることがあっても、盛者必衰会者定離 勢いの盛んな者はかならず衰え、出会った者はかならず別れる」と決まっているこの世のなかですから、長くそんなままでいることはできません。ただ五十年、百年の間のことです。

しかも、誰もがいつ死ぬやら知れぬ命であると感じれば、まことにたよりなく心細いものです。ですから、今の世の人びとは他力の信心をいただいて、浄土への往生をどうしようと思ふべきです。

さて、その信心をいただくためには、まったく知恵もいらず、学問もいらず、富貴も貧乏も関わりなく、善人も悪人も差別なく、男性も女性もちがいはありません。ただ、雑行を捨てて真実の信心をもって称えるお念仏一つに落ち着くことを本意とするばかりです。

そして、その真実の信心をもって称えるお念仏一つに落ち着くとは、自分のはからいを少しもまじえずに、ただ阿弥陀如来にふたごころなく、ひたすらにお従いするだけ。このように信ずる人びとを、阿弥陀さまは至らぬところなく照らす光明のなかにおさめ取られて、お捨てになることなく、この生涯が尽きてしまえばかならず浄土へお送りくださいます。

このように、阿弥陀さまの本願を疑いなく信ずる安心（信心）一つで浄土へ往生す

るので、ああ、なんと手もかからぬ、得やすい安心でしょうか。それで「安心」という二字を「易い心」と読むのは、この意味です。何の面倒なこともなく、ふたごころなく、ひたすらに如来にお従いさせていただく信心一つで、極楽に往生できるのです。

ああ、なんとわかりやすい安心でしょうか。また、ああ、なんと行きやすい浄土でしょうか。

こういふわけで、『天無量寿経』には、**易往而無人 往きやすく、しかも往く人がない**」と説かれています。この経文の意味は、**安心 信心**をいただいて阿弥陀さまにひたすらにおまかせするならば、浄土へ往かせていただくのはたやすいが、その信心をいただく人が稀にしかない、浄土へは行きやすいが、しかし往く人がいない」というのです。

このように心得たうえには、昼夜朝暮に称えるお念仏は、大いなる慈悲の心から起こされた広大なるお誓いのご恩にお応えするばかりのことです。

重ね重ね、仏法に心をとどめ、得やすい信心であることを知って、かならずや、このたびのわたくしどもにとってもっとも重大なことである、阿弥陀さまの真実の浄土への往生をとげてください。

あなかしこ あなかしこ
文明六年三月三日、これを清書しました。

易往而無人というのを、お浄土へは行き易いが、人として居るのではなく、仏さまと成っておられるのであり、また自由自在にこの世に還ってはたらいいてから、**無人**なのだ」と受けとられた方もおられました。なるほど思いました。蓮如上人は、阿弥陀さまを疑いなく信じて、ひたすらにおまかせするならば、浄土へ往かせていただくのはたやすいが、その信心をいただく人が稀にしかない、浄土へは行きやすいが、しかし往く人がいない」と述べられています。

親鸞聖人は、『**教行信証**』の中で、**信不具足**」**聞不具足**」のことを述べられておられます。そのうち、**信不具足**」について、**信**にまた二種あり。一つには聞より生ず、二つには思より生ず。この人の信心、聞より生じて、思より生ぜず。このゆゑに名づけて**信不具足**とす。また二種あり。一つには道ありと信ず、二つには得者を信ず。この人の信心、ただ道ありと信じて、すべて得道の人ありと信ぜざらん。これを名づけて**信不具足**とす。」とあります。**得道の人**とは、ご信心いただき、お念仏を申す人生を送っておられる方々の方でしょうか。私がご信心をいただいたかばかりを問題とし、ご信心いただき、お念仏申す身になられている方々がいらっしゃることを知ろうとしないところに、**無**人」と言われているのかなあと思っています。

浄土真宗本願寺派 真昌寺・稱讚寺 法話会

鶴田義光先生による “生きる仏教”

-安心して迷ってゆけばいい-
「ただ念仏」という生き方

日時: 2019年3月23日(土曜)

- 一席目 :10:00-12:30
- 二席目 :13:30-16:00
- 三席目 :16:30-19:00

各席とも法話の内容は異なります。一席だけの聴聞でも、連続参加でもお聞きいただける内容です。

場所: ムーブ町屋4階 会議室A (定員40名/地図は裏面ご参照)
(千代田線 町屋駅上 ☎:03-3819-7761)

聴聞費: 各席ごとに500円
申込み: 真昌寺/高安宛 (☎:080-5505-6752)
mail: gotkjp@yahoo.co.jp

参加申込みは、3月10日までにご連絡いただけますよう、お願い申し上げます。
鶴田先生のプロフィールと、今回の法話会のテーマは裏面をご覧ください。

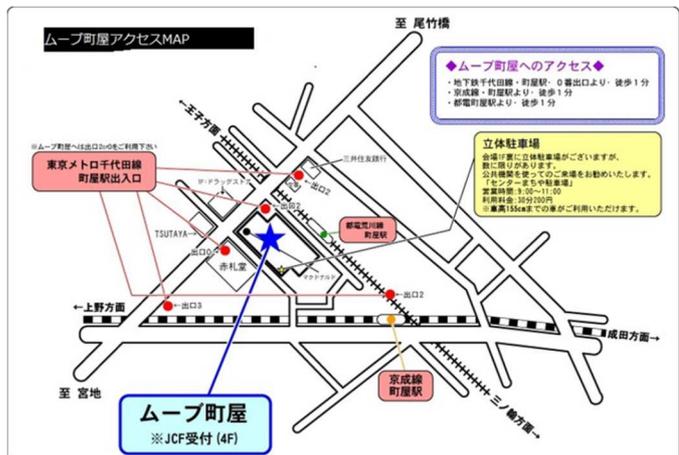
鶴田義光師 プロファイル:

1960年、大阪生まれ。愛知県の特別支援学校教諭。若き頃、生きる意味を求め、苦悩の末浄土真宗の教えを縁に廻心。現在、名古屋を拠点に念仏に生きる生活実践を中心とした愚深会という聞法会でほぼ毎週末講義。念仏とは、浄土とは、死後の世界の祈りではなく、生活実践の場で生きる仏法を唱導。

著書『すでにこの道あり』『歎異抄講述・聞書(一)、(二)』

- 法話会のテーマ: 『安心して迷ってゆけばいい
—ただ念仏という生き方—』

- 念仏とは何ですか?
- 教いとは何ですか?
- 浄土真宗の御利益は何ですか?
- 念仏は、おじいさん、おばあさんのためのものですか?
- 仕事に、生活に追われる私にどう関係するのですか?



稱讚寺 行事予定

二〇一九年二月の行事予定

三日 月	日曜礼拝 午前九時
六日 水	のんのん法話会 午後一時
一〇日 月	日曜礼拝 午前九時
一六日 土	のんのん法話会 午後一時
一七日 日	日曜礼拝 午前九時
二四日 日	日曜礼拝 午前九時
二六日 火	のんのん法話会 午後一時

二〇一九年 三月の行事予定

三日 月	日曜礼拝 午前九時
六日 水	のんのん法話会 午後二時
一〇日 月	日曜礼拝 午前九時
一六日 土	のんのん法話会 午後二時
一七日 日	日曜礼拝 午前九時
二二日 木	東久留米春季彼岸会
二三日 土	真昌寺・稱讚寺法話会 講師 鶴田義光師 会場 ムーブ町屋四階
二四日 日	日曜礼拝 午前九時 春季彼岸会法要 午後二時
二六日 火	のんのん法話会 午後二時

カ

世界仏教婦人会大会 日本 アメリ

旅行期間 八月三〇日 金 ～ 九月六日 金

八月三十一日・九月一日 大会参加

旅行代金 六二〇,〇〇〇円 ※燃油サーチャージ二八,〇〇〇円

申込締切 二〇一九年三月二十九日 金

※世界大会に参加してみたい方は、稱讚寺にお問い合わせてください。詳細の募集要項をお送りいたします。

仏道

わたし し みち
私を知らされる道

二〇一九年 心のともしび「二月カレンダー

ダーより

二〇一九年 二月 法務 布教 出向予定

二日 土	鍛冶澤家法事 十時 東組連研
三日 日	桐生家 一周忌法要 十二時 川上家 十三回忌法要 十四時
四日 月	坂根家 祥月命日法要 九時半 西真 一様葬儀 十二時
五日 火	東組組内会・新年会
八日 金	小田家 三回忌法要 十二時
九日 土	西沢みつ様 通夜 十八時
一〇日 日	西沢みつ様 葬儀 十時 太田家 納骨法要 十時 段下家 納骨法要 十四時
一七日 日	松山家 納骨法要 十二時
一九日 火	社会福祉推進協議会講演会 講師 釋 徹宗 師
二四日 日	中組 二音寺 定例法座 十三時

涅槃会 布教大 期日 二月十五日 金

東京教区 仏壯連盟 結成記念 日研修

期日 二月十七日 日 ～ 十八日 月

会場 石和温泉 担当 多摩組

東京教区 仏教婦人会 連盟 一日研修

期日 三月一日 金 会場 築地本願寺・本堂